デファン夫人のアパルトマンの復元的考察

—建築と家具と絵画で構成される18世紀フランス女性の空間

RESTITUTION AND STUDY ON MADAME DU DEFFAND'S APARTMENT

—18th century French women's space defined in terms of architecture, furniture and paintings

小柳 由紀子*, 土居 義岳**

Yukiko KOYANAGI and Yoshitake DOI

This study aims both at reproducing the original plan of Madame du Deffand's apartment based on her inventory after death and at defining the feminine specificity of 18th century French women's habitations. Using this method based on the inventory after death developed by the *École d'Annales* in France, we describe the functional characteristics of each room, mainly in terms of size and design. Analyzing the restitution's results in perspective with the knowledge of fine art and furniture, we shed further light on the social and cultural life of 18th century French women.

keywords: Madame du Deffand, France, 18th century, furniture, interior design, inventory after death

デファン夫人、フランス、18世紀、家具、室内装飾、死後財産目録

1. 序

本研究は、死後財産目録からの建築プランの復元という、アナル学派¹⁾などのフランス歴史学において確立されたオーソドックスな方法によって、いわば、女性の世紀ともいえる²⁾18世紀フランスにおける生きられた女性の空間を復元しようとするものである。

しかしここでは、既存の方法の単純な再活用により平面を即物的に復元するにはとどまらない。この方法論をさらに展開し、いわゆる間取りのみならず、家具や美術コレクションが構成するいわば文化的・美術的な空間をも復元する。つまり建築のみならず、家具や美術といった近隣領域の専門的知見をも適用することで、生きられた空間全体の復元を目指す。

また、そうして空間の機能的特性にくわえ文化的・芸術的な性格をも明らかにしつつ、女性だけが生活者であるような住居の女性性について、取り上げたいと思う。すなわち建築をジェンダーの視点から考察する³⁾ための手がかりを供給しようとするものである。

本稿は、フォブール・サン・ジェルマン地区(Faubourg Saint-Germain)にあった、デファン夫人(Mme du Deffand, 1696/1697-1780, 旧姓マリー・ド・ヴィシー＝シャンブロン Marie de Vichy-Champrond)のアパルトマンを対象とする。彼女はひとり住まいを続けつつ、18世紀の代表的なサロンを主催していたので、

死後財産目録や遺言のみならず、同時代の人々による書簡や伝記⁴⁾が多く、より詳細な室内の復元が可能だからである。

2. デファン夫人とそのアパルトマンの経緯

デファン夫人は現在のソーヌ・エ・ロワール県(Saône-et-Loire)の名門貴族の出身である。1718年にジャン＝バティスト＝ジャック・デュ・デファン、ラ・ランド侯爵(Jean-Baptiste-Jacques du Deffand, marquis de La Lande)と結婚するが、1721年に別居する。1730年にパリ高等法院長エノー(Charles-Jean-François Hénault)と知り合い、パリのボーヌ通り(rue de Beaune)の住居でサロンを開く。1747年、エノーの経済的援助により、新居のための家具、壁布などを購入し、現在のパリ7区のサン・ドミニク通り(rue Saint-Dominique)の建物の、2階のアパルトマンを借りて引っ越し、1747年4月から、亡くなる1780年9月23日までの33年間を、ここで暮らした⁵⁾。(図1)⁶⁾

この建物そのものは、聖ヨセフの娘たち修道院(couvent des filles de Saint-Joseph)の敷地内であり、1690年以降の建設と思われる⁷⁾。現在は防衛省の一部である⁸⁾。

そもそも1690年代、このアパルトマンはルイ14世の愛妾モンテスパン夫人(Mme de Montespan)のものであった。1709年以降

* 九州芸術工科大学大学院生活環境専攻
博士課程後期・修士(芸術工学)

** 九州芸術工科大学環境設計学科 教授・博士(工学)

Graduate Student, Division of Living Environmental Studies, Kyushu Institute of Design, M. Design

Prof., Dept. of Environmental Design, Kyushu Institute of Design, Dr. Eng.

は、シャチヨン公爵 (duc de Châtillon)、フレジユス司教(l'évêque de Frejus)などが住んでいた⁹⁾。「目録」によれば、食堂と寝室が、廊下を介さず直結されている。これは、17世紀的な古式な間取りである。つまり、モンテスパン夫人のアパルトマンの間取りが、デファン夫人の転居までほとんど変化せず、彼女も根本的な改装はおこなわなかったと考えられる。

デファン夫人はこの転居の時点ですでに高齢であった。数年後には完全に失明してしまい、日常生活には人の手が不可欠だった。また夜就寝することへの恐怖から明け方まで話し相手を必要としていた、などの特殊事情もあった¹⁰⁾。

いずれにせよ、そこは私生活のみが展開される引きこもりのためではなく、接客や社交が第一義とされる空間であった。主人は女ひとりだが、背後には召使がいる、といった生活形態であった。そのなかに当時の女性の住居における、女性性がかいま見られる。

3. 空間の復元

3.1 建物とアパルトマンの概略

1740年のチュルゴーの地図(図1)や、現状に近い18世紀後半の平面図(パリ市歴史図書館所蔵)(図4)¹¹⁾などから、配置が復元される。聖ヨセフの娘たち修道院の建物は3棟からなっていた。サン・ドミニク通りに面した1棟、西側の勝手用中庭に面した1棟、そして北側の外庭に面した1棟である。この北側の棟の前庭(la cour intérieure)に面した部分のアパルトマンは一部屋ないし二部屋の簡素なつくりで、おもに独身者むけであった。外庭(la cour extérieure)に面した部分は、複数の部屋からなるアパルトマンで貴族の老婦人や高位聖職者たちが借家人として暮らしていた¹²⁾。

デファン夫人が住んでいたのは後者のアパルトマンで、礼拝堂に隣接した2階の庭園側に位置し、図1の⑤の部分に相当する¹³⁾。パリ市歴史図書館蔵の平面図には縮尺約1/285とあるので、この建物は幅が約11mであることなどが判明する(図4)。

アプローチにかんしては、クラヴェリらの記述によれば、デファン夫人のアパルトマンの書斎から、直接礼拝堂へ降りることができた¹⁴⁾。たとえば間取り図5が想定できる。

諸室について、「目録」は次のものに言及している。

- 1 食堂の廊下に続く玄関 (le vestibule donnant dans le corridor de la salle à manger)
- 2 庭園に面した食堂 (la salle à manger ayant vue sur le jardin)
- 3 修道女たちの庭園に面した寝室 (la chambre à coucher ensuite ayant vue sur le jardin des religieuses)
- 4 庭園に面した化粧室 (le cabinet de toilette ayant vue sur le jardin)
- 5 小さな衣裳部屋 (une petite garde-robe)
- 6 書斎に続く玄関と階上席 (le vestibule et la tribune conduisant à la bibliothèque)
- 7 庭園と教会に面した書斎 (la bibliothèque ayant vue tant sur le jardin que sur l'église)

「目録」には故人の動産とその評価額のみが記されている。部屋の寸法、造り、窓や扉の数や幅などは直接には記されていないが、家具や調度にかんするその記載から、かなり具体的に推定できる場合

もある。以下にそれを試みる。

3.2 「玄関」について

「目録」によれば玄関は、上記1と6の、2つある。1の玄関には、5連の衝立のみがある。6の玄関と階上席は「ベンチ」「あんか」「ランプ」「呼び鈴」などがあることから召使の待機場所であったことがわかる。すなわち主人の玄関と召使の入口が区別されていたと思われる¹⁵⁾。

3.3 「書斎」について

書斎には、「古いダマスク織布張りの椅子」1脚、「籐製の肘掛け椅子」1脚、「カーテン」、「絨毯」2.5 オーヌ×1.25オーヌ(1 aune=1.18mで換算して、約3m×約1.5m)以外に、家具、美術品はない。蔵書は500冊以上あったが¹⁶⁾、「目録」には、本棚(armoire bibliothèque)や、棚(étagère)についての記述はなく、書架は造り付けだったと考えられる。

3.4 「食堂」の復元(図2)

3.4.1 寸法

「目録」には、食堂は「ドア・カーテン4つとカーテンが4枚(4 portières et 4 parties de rideaux)」とあるので、扉が4つと窓が2つあることがわかる。

扉のうち2つは、左手の寝室に通じる扉と、右手の書斎へ行く扉であろう。通常、庭園側にそって部屋が一行に並ぶ場合、扉は窓に沿った同一線上に並べられることからである。残りの2つは、廊下から食堂に入る扉、つまり窓と向かい合う位置にある扉であろう。左右対称となるように、1つは偽扉の可能性もある。

壁布については、「目録」には「丈が2.75オーヌで、7つの部分からなる総長14オーヌの、黄色地に緋色のリボンと帯状の模様が織られた布…」と寸法が記載されている。したがって壁布で覆われた部分の壁は、丈は約3.3m(=2.75aunes × 1.18)、総延長約16.6m(=14aunes × 1.18)である。

鏡が壁布以外の壁を覆う。鏡は最も高価な動産のひとつなので、たいいて寸法が明記される。「目録」に記載された寸法から、「窓間鏡」は縦51ブース(1pouce=0.027mで換算して、約1.38m)、横31ブース(約0.84m)の大きさとなる。同様に「暖炉上の鏡」と「暖炉正面の鏡」は、縦約1.46m(54pouces × 0.027)、横約1.03m(38pouces × 0.027)である。

これらの与件を総合的に勘案し、壁布は、18世紀のタピストリーの飾り方と同じく、額に入れられ、腰板の上に置かれるとする¹⁷⁾。窓、扉、暖炉、窓間鏡、7枚の壁布を、部屋の縦横のバランスと、左右対称の構成を考慮して、配置すると、図2展開図のようになる。平均的な寸法¹⁸⁾の暖炉(幅1.9m)、扉(高さ3m、幅1.75m)、コーニス(高さ0.3m)、腰板(高さ1m)を仮定すると、縦約6.8m 横約11.3m、天井高約4.8mが得られる。

3.4.2 家具

「目録」によれば、「レジャンス様式のコモッド(commode à la Régence)」「(小箆筭)(D)1つ、「ゲーム・テーブル」(E)2つ、「衝立」(F)1つ、などがあった。椅子は全部で14脚、すべてカーテンや壁布と同じ黄色と赤の色合いの布が張られていた。

椅子の種類について、6脚はカブリオレ型(en cabriolet)と記され

①: サン・ドミニク通り ②: 中庭 ③: 礼拝堂 ④: 外庭 (修道女達の庭)
⑤: デファン婦人アパートマン (2階白抜き部分)

図1 聖ヨセフの娘たち修道院全景(チュルゴーの地図 1740年)

図2 食堂展開図

- 凡例
A: 王妃風肘掛椅子
B: カプリオレ型肘掛椅子
C: 王妃風椅子
D: レジャンス様式の komod
E: ゲーム・テーブル
F: 衝立
G: 書き物机
H: コーナー家具
I: ナイト・テーブル
J: ティー・テーブル
K: 4人掛けの長椅子
L: ポーランド風寝台

図3 寝室展開図

図4 聖ヨセフの娘たち修道院
1階平面図(部分)
(パリ市歴史図書館蔵のものに、推定部屋名と寸法を書き足したもの)
(単位m)

図5 デファン夫人アパートマン平面図の復元 (単位m)

図6 食堂再現イメージ

図7 レジャンス様式の
 komod (D)

図8 王妃風
肘掛椅子
(A)

図9 カプリオレ型
肘掛椅子
(B)

図10 ポーランド風
寝台 (L)

図11 公爵夫人風
寝台

図12 ブールの
 komod

図7~10の家具は、実際に使用されていたものではなく、デファン夫人の家具と様式的に類似する代表例である。

ている。残りの椅子4脚と肘掛椅子4脚については、形の明記がない。当時、椅子の種類は、カブリオレ型¹⁹⁾と王妃風(à la reine)²⁰⁾の2つに大別され、普通、両方が、一部屋に置かれていたことから、それらは王妃風のものであったと推測できる。

つぎに復元だが、まず家具の細部やデザインについては、「目録」に具体的な記載はない。したがって各タイプの代表的なデザイン²¹⁾であったと仮定する。

つぎに配置にかんしては、やはり「目録」には記述がない。しかし家具史における通説では、次のような配置が一般的とされる²²⁾。すなわち、大型の、背もたれの平らな「王妃風肘掛椅子」(図8, A)や、「コモッド」は、壁や窓際にそって並べられる。背もたれが湾曲した「カブリオレ型肘掛椅子」(図9, B)は部屋の中央部分に置かれ、軽い「ゲーム・テーブル」などとともに、来客の数に合わせて移動される。三角形の「コーナー家具」は部屋の隅に置かれることが多い。

また小型の「書き物机」(G)は、暖炉の近くに置かれていたと考えられる。一般的に、当時の室内絵画資料²³⁾では、暖炉の周囲の情景が多く描かれている。暖房、照明設備が不十分なこの時代は、家具を暖炉の前に移動し、そこで読書、着替え、食事、手紙を書くといった私的な行為を営むことが多かったからである。

以上から「図2」をひとつの復元案として作成した。

この部屋では、どのような生活が営まれたのであろうか。「目録」では食堂(salle à manger)とあるが、常設の食卓はない。したがって18世紀後半に一般化していく食事室としての専門の役割を持った部屋ではない。クラヴェリによるデファン夫人伝記によれば、この部屋ではサロンの集まり、朗読、ゲーム、定期的な夕食会などが催された²⁴⁾。客の数に合わせ家具を移動させることによって、さまざまな用途に用いられていたことが想像される。置かれた家具の種類から、こうしたことはじゅうぶん可能であった。

3.4.3 美術品

「目録」には、食堂の美術品の記載はない。

3.5 「寝室」の復元(図3)

3.5.1 部屋の寸法

「目録」には「3.5 オース(約4.2m)のカーテンが6枚と同様の丈のドア・カーテンが2枚」、「3つの部分からなる15 オース(約17.8m)の、黄色地に緋色のリボンの織りのあるシルクサージ…」とある。食堂と同様の方法で、3つの窓と2つの扉、3枚の壁布の配置を想定すると、縦約6.8m×横約13.3mほどの広さであったと考えられる。

3.5.2 家具

「目録」からは、ここは食堂よりも豪華に飾られていたことが想像される。すなわち「クリスタルと銀メッキ銅製の5枝のシャンデリア」があり、鏡や壁布の周囲の額やコンソールの脚には金箔が施されていた。また暖炉の炉棚には、遺言書によってボヴォー大公(prince de Beauvau)に贈与されることになる「マントルピースの飾り置物一式 garniture de cheminée」²⁵⁾という豪華な装飾の飾り物があった。

寝台は「ポーランド風天蓋付き寝台(lit à la polonaise)」(図10, L)²⁶⁾である。17世紀に、儀礼用寝室(chambre d'apparat)

で用いられた「公爵夫人風(lit à la duchesse)、あるいはフランス風(lit à la française)寝台」と呼ばれる、天蓋がマットレスと同じ大きさの寝台(図11)とくらべると、このデファン夫人の寝台は、造形的に、優雅で女性的な印象を与える²⁷⁾。

18世紀のポーランド式寝台では、木部に金箔が施されたり、天蓋上にオストリッチの羽飾りがおかれ、房飾りで豪華に飾られることもあった。しかし「目録」のなかの寝台は、壁布と同じ布が使われ、木部は灰色に塗られているのみで、同種のものの中なかでは、かなり簡素であった。すなわち、格式の高い儀礼用寝室のための特別のものではなかったと推定できる。

つぎに、「目録」と遺言書²⁸⁾によれば、「ナイト・テーブル」(I)や「ティー・テーブル」(J)、「文机」といった小型の家具が、部屋のあちこちに置かれていた。18世紀に特徴的なこれらの家具²⁹⁾は、装飾的な役割と同時に、パーソナルな使用目的のための家具と考えられる。実際、これらの家具には、デファン夫人愛用の磁器のコレクション、蔵書などが展示され、現金も収納されていたことが「目録」と遺言書に記載されている³⁰⁾。すなわちここでは接客とともに、日常生活も営まれていたと考えられる。

つぎに椅子であるが、「4人掛けの長椅子」(K)1脚、2種類の「カブリオレ型の肘掛椅子」(B)計12脚、「王妃風肘掛椅子」(A)5脚が置かれ、20人近い来客に答えることができるようになっていた。椅子の仕上げには、食堂の椅子同様、高価な金箔は用いられていない。

特徴的なのは、食堂にはなかった「長椅子」があることで、この寝室での接客に、快適さや安楽さも求められたことが読み取れる。

3.5.3 美術品

「目録」によれば、「^{とぎん}鍍金銅製の台座にのった磁器製の頭部の像」2点、「浮き彫り」1点、「^{とぎん}鍍金銅製の台座にのったビスキューイ製³¹⁾の像」1点があった。これらは、ボヴォー大公に贈与された、「マントルピースの飾り置物一式」の一部である。暖炉上にあったことから、どれも小品であったと考えられる。

また、絵画としては、「目録」によれば、「カラッチ(Carracci)の男性の顔を描いたつづれ織り画」一点のみだった。

3.6 「化粧室」について

3.6.1 性格

アパルトマンの奥に位置するこの化粧室は、中二階を持つ天井の低い小部屋で、ストーブを使った暖房効率もよい部屋であったと考えられる。「目録」によれば、内装は食堂や寝室のような壁布張りではなく、より安価な「青い壁紙」が用いられている。「目録」には、「壁紙5枚」とだけ、記されており、長さの記述はない。そのため、部屋の寸法を推測することは、不可能である。

3.6.2 家具

「化粧台」のほかに、布張りよりも安価で格式の低い「籐製の肘掛椅子」5脚と「黒檀のトリック・トラック(table de tric-trac)」(ゲームテーブルの一種)が置かれていた。「寝室」と「衣裳部屋」に隣接するこの化粧室は、最も私的な領域であり、ほんとうに親しい友人を受け入れる、非常に親密な場であったと考えられる。

3.6.3 美術品

「目録」によれば、30点もの「版画」、「デッサン」、「ヴォ

ルテルの胸像」などが並べられていた。これらの「版画」と「デッサン」について、「目録」では、「方形あるいは楕円形」とだけ記されており、作品名や画家についてはまったく言及していない。当時の財産目録では、有名な画家についてのみ、作家名や作品名の記述がある³²⁾。このことから、デファン夫人所有の作品には、コレクションとしての価値はなかったと考えられる。また、宗教心の全くなかったと言われるデファン夫人であるから³³⁾、聖母子や磔刑図のような宗教画が、化粧室にあったとは考えがたい。むしろ、小型の肖像画や当時流行した風景画など、女主人にとって心地よい絵が、額や画材といった装飾的役割を考慮しながら、選ばれたものと考えられる³⁴⁾。

3.7 「衣裳部屋」について

化粧室の奥が衣裳部屋であり、そこから小階段で中二階に上がると、そこは召使いの部屋になっていた。「目録」では、この衣裳部屋には、「棚」4つ、「磁器のポプリ壺」1つ、「陶器の壺」3つ「ビデ」1つ、「椅子型の便座」1器のみである。トイレとして使用されていたと考えられる。

4. 復元結果の分析

4.1 間取りと家具の配置の観点から

「食堂」や「寝室」は、ともに応接間としての機能をもっていた。ド・トリュシス(De Truchis)の研究でも、デファン夫人は、寝室でも接客をおこなっていたとある³⁵⁾。どちらの部屋も、椅子の数からしてかなりの多人数を収容でき、サロンの集まりにふさわしい広さであった。

「食堂」は、金箔をまったく用いていない内装であったのにたいし、「寝室」は、金箔と、暖炉炉棚の飾りや磁器で飾られた豪華な内装であった。つまり、あきらかに「寝室」のほうが「食堂」よりも格式が高い。これは、心理学者でフランス住宅史の専門家でもあるモニク・エレブ＝ヴィダル(Monique Eleb-Vidal)の称する、古典主義時代の「選択的な社交」の概念に近いといえよう³⁶⁾。

「食堂」は、2種類の椅子とゲーム・テーブルがある、純粋な接客の場であった。

「寝室」は、社交のための儀礼用寝室であると同時に、就寝用寝室でもあった。就寝専用の寝室としては、広すぎ、天井も高いから、快適さには欠ける。衝立のような間仕切りもまったくない。しかし、この「寝室」には、「食堂」にはない「長椅子」といった快適で安楽な家具や、「ティー・テーブル」、「ナイト・テーブル」「文机」といった小型でパーソナルな家具がおかれている。また、コモッド(小箆)などの単なる収納家具ではなく、棚のついたテーブルやティー・テーブルといった展示を兼ねた家具の上に、「目録」と遺言書によれば、愛読書や磁器などが置かれている。このことから、「寝室」では、「食堂」よりも快適さが求められ、女主人の個人的な趣味や嗜好がより明確に示されていたと考えられる。

「書斎」については、椅子が2脚あるだけで、美術品などの装飾のない簡素な部屋であった。このことから、通常、接客には使われなかったと思われる。また、机や収納家具もないので、目の不自由なデファン夫人の日常生活で重要だった、執事による書簡の口述筆記なども、ここでは行われなかったと考えられる。本の置き場所と

しての役割が主であったと推定できる。

「化粧室」は、アパルトマンの奥に位置し、脇掛椅子が5客もあることから、親密な社交の場として、ブドワールの役割³⁷⁾も持っていたといえる。

4.2 絵画コレクションの観点から

コレクションが化粧室という、いちばん私的な場所に限定されていたことは、女性性を考えるうえで、きわめて重要である。

一般的に男性のアパルトマンでは、絵画コレクションは、室内でも公的なスペース、それも多くの場合は、控えの間に入っすぐの住居を訪れた客の目に付くところに置かれていた。たとえばボンパドゥール夫人(Mme de Pompadour)の弟、マリニー侯(marquis de Marigny)のヴィクトワール広場(Place des Victoires)に面したホテルでは、2階の接客用のアパルトマン(l'Appartement de réception)の中で、控えの間、食堂、客間、音楽の間に続くギャラリーに飾られている³⁸⁾。また、ティエリーの『…パリ・ガイド』では、絵画コレクションで有名な29軒の住居が言及されているが、ノアイユ公爵(duc de Noaille)³⁹⁾、ブリサック公爵(duc de Brissac)⁴⁰⁾のホテルなどでも、有名画家の名画が、控えの間からすぐのサロンに飾られている。

いっぽうティエリーが言及した29人の絵画コレクターのうち、女性はソラン夫人(Mme Sorin)⁴¹⁾ただ一人である。すなわち絵画コレクションとは、おもに男性の社会的ステータスの象徴であった。

同様に、デファン夫人の住居では、寝室にあった「カラッチの男性の顔を描いたつづれ織り画」(頭部のみが描かれており40×30cmほどの小型のものであったと考えられる)以外は、食堂、寝室の広い壁布張りの壁面には、まったく絵画が飾られていなかった。彼女もまた、絵画コレクションにより社会的地位や富を誇示するということはなかったのである。

部屋ごとに述べてきたように、「目録」によれば、絵画コレクションのほとんどは「化粧室」に集中していた⁴²⁾。この部屋は親密な社交の場としての特性をもっている。つまり、絵画コレクションが、私的な思い出や、ごく親しい友人との、観賞のためのものであったことを物語っている。

4.3 家具様式の視点から

「目録」で列挙されている家具は、レジャンス式、あるいはトンボー型コモッドや、古い張物のコーナー家具、暗褐色の大理石天板のコンソールなどである。ところが、18世紀後半に多く見られるマホガニー材や、白大理石を天板に用いたネオ・クラシック様式の家具は、ほとんど存在しない⁴³⁾。

またデファン夫人は、ここに引越す前年の1746年、アヴィニョンで布を注文している。彼女の書簡⁴⁴⁾やド・セギュール⁴⁵⁾の記述によれば、「緋色のリボン模様のある黄色のモアレ」とある。これは「目録」に記された食堂や寝室の壁布やカーテンの記述「黄色地に緋色のリボンと帯柄のシルク・サージ」と一致する。つまり、壁布は、デファン夫人が亡くなるまで、取り替えられることはなかったと考えられる。

以上のように、30数年間、家具の買い替え、内装の変更は、ほとんどなされなかったようである⁴⁶⁾。

家具様式の観点からも、デファン夫人の住居は、男性的なステイタス誇示とはちがう性格を反映していた。前述のティエリ著『…ガイド』から引用した男性のアパルトマンの例では、絵画が置かれた諸室の内装は、一様に、緋色のダマスク織りの壁布が張り巡らされ、大理石の胸像や王や先祖の肖像画とともに、重々しいブールの家具（図 12）⁴⁷⁾が置かれている⁴⁸⁾。つまり、アパルトマンを訪れた客が最初に目にする部屋は、非常に伝統的な様相をした、儀礼的な空間であり、絵画は他の調度品とともに、主の社会的地位や権力、あるいは財力を誇示する役割を強く持っていたといえる。

こうしたダマスク織りの壁布やブールの家具が見られないという点でも、デファン夫人の住居は、典型的な男性のアパルトマンとは違う性質のものであった。

5. 結論

以上のように、間取り、室内装飾、家具、コレクションの種類や、空間配置を復元、分析することによって、デファン夫人の生きた空間の、女性性を具体的に示した。

デファン夫人のアパルトマンでは、17 世紀の間取りがそのまま踏襲され、内装については、壁布をはじめとして、30 数年間大きな変更はなかったようである。家具も、買い換えはほとんどなく、引越したときのものが、1780 年まで使われていたと考えられる。また、「食堂」と「寝室」には、内装や家具、調度品により、17 世紀の住居同様に、格式の上下が明確に現れている。

一方、アパルトマンの使い方は、18 世紀後半の同時代の状況を反映しており、いろいろな女性性が現われていた。3 点挙げる。

(1) 儀礼的寝室と就寝専用寝室の区別がなく、一つの「寝室」において、「食堂」よりも親密な社交と、日常生活が営まれていた。

(2) コレクションは、アパルトマンの奥の「化粧室」にのみに置かれ、絵画や版画は、個人的なつきあいを演出するに限定されていた。

(3) 「化粧室」は快適なプライベート空間であると同時に、選択された人々とのつきあいの空間という、「ブドワール」に相当する性質があったと想像される。

つまり、そこには、男性の空間とは異なる女性の空間が意識され、それが明瞭にでているのである。

注：

1) Madeleine Jurgens et Pierre Couperie, *Le logement à Paris aux XVI^e et XVII^e siècles. Une source : les inventaires après décès*, *Annale*, Paris, 1962, 5-6, p.488-500 ;がアナル学派による代表的論文。参照：土居義岳『近年のフランスにおける住宅研究の動向』建築史学、第 23 号、1994、p.128。

2) 18 世紀フランスでは、女性の役割が大きくなったという指摘は一般的である。

「18 世紀の女性は、支配する原則であり、指導する理性であり、命令を下す声である。」エドモンド・ゴンクール、ジュール・ド・ゴンクール、鈴木豊訳『ゴンクール兄弟の見た 18 世紀の女性』平凡社、1994、p.344。

「摂政時代について語ったモンテスキューの言葉・・・18 世紀では女性が主役になった。」マックス・フォン・ベーン、飯塚信雄訳『ロココの世界・18 世紀のフランス』三脩社、2000、pp.123-124。

「ダヴィッド・ヒュームは、フランスについて、女性の国 (Pays des femmes) と表現している。」Cf. François Bott, *La Demoiselle des Lumières*, Paris, 1997, pp.56-57。

3) Monique Eleb-Vidal avec Anne Debarre-Blanchard, *Architecture de la vie privée, Maisons et Mentalités XVII^e-XIX^e siècles*, Bruxelles, 1989 では、オテル建築における男性の空間 (l'espace de l'homme) と女性の空間 (l'espace de la femme) の存在、18 世紀におけるブドワールの誕生が、女性の生活にたいする新しい認識として、述べられている。

4) 以下の資料をおもに参照した。なお CHAN=フランス古文書館。死後財産目録：

Inventaire après décès, Procurations de Nicolas de Gaspart de VICHY, héritier de la marquise du DEFFAND (CHAN, Réserve du minutier central des notaires de Paris, RS/525 à RS572, microfilm Rés 532)。 (本文中の「目録」。1780 年 10 月 16 日付) Wilmarth Sheldon Lewis and Warren Hunting Smith, *Horace Walpole's correspondance*, vol. 8, London, 1939, 1970。

遺言書：

Testament De marie De Vichy De Chamron(sic) veuve De Mr. Le marquis Du DEFFAND (CHAN, Réserve du minutier central des notaires de Paris, RS/525 à RS572, microfilm Rés 527/528/529/530/531)。

伝記・書簡集：

Marquis de Ségur, Pierre-Marie-Maurice- Henri, *Esquisses & Récits: Madame du Deffand et sa famille, L'Éducation féminine au XVIII^e siècle, Le Comte L. Ph. de Ségur*, Paris, 1908。

Benedetta Craveri, *Madame du Deffand et son monde*, Paris, 1999。

Wilmarth Sheldon Lewis and Warren Hunting Smith, *Horace Walpole's correspondance*, vol. 3-8, London, 1939, 1970。

風俗誌的文獻：

Louis-Vincent Thiéry, *Guide des Amateurs et des Étrangers, voyageurs à Paris*, tome I-II, Paris, 1787。

研究書：

DAAVP(Délégation à l'action artistique de la ville de Paris) et

SHA(Société d'histoire et l'architecture), *Le Faubourg Saint-Germain, La rue Saint-Dominique, Hôtel et Amateurs*, Paris, 1984。

5) B.Craveri, *op.cit.*, pp. 99-101. Georges Grente et François Moureau, *Dictionnaire des lettres françaises*, Paris, 1996, p.424。

6) 1740 年チュルゴーの地図 (W. S. Lewis and W.H. Smith, *op.cit.*, vol. 8, p.2)。

7) グルネ(Gournay) によれば、1689 年 3 月 21 日に、モンテスパン夫人とヴェルサイユの大工トマ・ブティボンは、教会と修道院付属の建物との間に建設する、モンテスパン夫人の住居となる予定の建物について、工事契約を結んだ。ゆえに建設は 1690 年以降と考えられる。Cf. Brigitte Gournay, *Habitat privé (DAAVP et SHA, op.cit, pp. 187-188)*. Marie-Thérèse de Truchis, *Le Salon de Mme du Deffand (DAAVP et SHA, op.cit., pp.188-189)*。

8) 聖ヨセフの娘たち修道院があったのは、サン・ドミニック通り旧 80-86 番地 (現 10-12 番地に相当)。現在は防衛省の一部である。

9) B.Gournay, *op.cit.*, pp.187-188。

10) M.Th. de Truchis, *op.cit.*, p.189. B.Craveri, *op.cit.*, p.144。

11) Plan: *Rue Dominique. Couvent des cy-devant dames saint-Joseph. Fin du XVIII^e siècle. Echelle de trois lignes pour toise (1 : 285 environs)*, Bibliothèque historique de la ville de Paris, cote B601。

12) B.Gournay, *op.cit.*, p.187。

13) W. S.Lewis and W.H. Smith, *op.cit.*, vol. 8, p.3。

14) クラヴェリによれば「2 階の侯爵夫人が住んでいたアパルトマンは、隣接する礼拝堂に直結していた」 (Cf. B.Craveri, *op.cit.*, p.102.)。ルイスとスミスも同様に指摘 (Cf. W. S.Lewis and W.H. Smith, *op.cit.*, vol. 8, p.4.)。しかし階段の位置を確定できるほどの情報はない。

15) 「玄関」という記載は「目録」のみ。図 5 は一例。現状の資料では、玄関の位置や動線を完全に特定はできない。

16) 遺言書によれば「ボヴォー大公に、私 (デファン夫人) の蔵書のうち、彼が選んだ 500 冊を贈与する」。

17) ソーントンによれば「18 世紀、壁面の布は、通常、棒状の枠の上に釘を打ち壁に固定され、この釘を隠すよう、金箔や彫刻や彩色が施された木の額が付けられた」。Cf. Peter Thornton, *L'Époque et son style, la décoration intérieure 1620-1920*, Paris, 1984, p.100。

- 18) 暖炉、扉、コーニス、腰板の寸法については、P.Thornton, *op.cit.* やその他の文献にある、18世紀室内についての、壁面平面図や部屋の展開図をもとに、平均値を出した。
- 19) 「カブリオレ型の椅子(Siège en cabriolet)とは背もたれが凹面である椅子」 Cf. Ministère de l'éducation nationale et de la culture, *Le mobilier domestique*, Paris, 1992, p.48.
- 20) 「王妃風椅子(Siège à la reine)は、ルイ15世またはルイ16世様式の特徴を持つ背もたれが平らな(長方形、正方形、楕円形などの)椅子」である。Cf. *op.cit.*, p.48.
- 21) 家具の寸法については、以下の文献からの諸例の平均値を出した。Pierre Kjellberg, *Le mobilier français du XVIIIe siècle*, Paris, 1998; P.Verlet, *Le Mobilier royal français I-IV*, Paris, 1990-1994; Daniel Alcouffe, Anne Dion-Tenenbaum, Amaury Lefebvre, *Le Mobilier du musée du Louvre tome I-II*, Dijon, 1993; Madeleine Jarry, Pierre Devinoy, *Le siècle français*, Paris, 1973.
- 図7, 8, 9, 10, 11, 12の写真はそれぞれ、Ministère de l'éducation nationale et de la culture, *Le mobilier domestique, vocabulaire typologique*, Paris, 1992, pp.497, 113, 115, 252, 257, 494から転写。この文献は副題が示すように、一種の家具辞典であり、家具史の代表的な資料である。デファン夫人の使用した年代(1747-80)を考慮し、「目録」中の引出しの数やブロンズ装飾の有無などにかんする記載に近いものを選んだ。椅子については、カブリオレ式と王妃風の顕著な違いである背もたれのカーブの有無がわかるよう、木部本体のみの写真を使用した。
- 22) Cf. M.Jarry, P.Devinoy, *Le siècle français*, Paris, 1973, pp.92-93; P.Verlet, *La maison du XVIIIe en France*, Paris, 1966, pp.133-134.
- 23) 18世紀の画家と版画家の風俗画や肖像画など81点を参照した。画家ニコラ・ラフレンセン(Nicolas Lavreince)の《化粧》、フランソワ・ブーシェ(François Boucher)の《朝食》、ジャン＝フランソワ・ド・トロワ(Jean-François de Troy)の《モリエールの朗読》、ジャン＝バティスト・マレ(Jean-Baptiste Mallet)の《新婚夫妻への訪問》、版画家ジャン＝ミシェル・モロー(弟)(Jean-Michel Moreau le Jeune)の《花嫁の就寝》、ガブリエル・サントーバン(Gabriel Saint-Auban)の《舞踏会》など。
- 24) B. Craveri, *op.cit.*, p.102.
- 25) 「目録」によれば、ボヴォー大公に贈与されたマントルピースの置物は、セーヴル磁器のパンチ・ボール、翡翠の壺3個、柄と蓋が鍍金銅製の壺2個、鍍金銅製の台座の付いた磁器製の頭部像2個など。
- 26) 「ポーランド風寝台はマットレスよりも小さな天蓋が、S字、あるいはC字の金属支柱で支えられた寝台、天蓋の形は、円形や長方形がある。」…Ministère de l'éducation nationale et de la culture, *op.cit.*, p.252.
- 27) ヴェルレによれば「ポーランド風寝台の誕生については、公爵夫人風寝台とは異なる、多様な形をもつ、天蓋の大きさにおいてもさらに優雅な寝台が、求められるようになった」。P.Verlet, *La maison...*, p.143.
- 28) *Testament De marie De Vichy De Chamron(sic) veuve De Mr. Le marquis Du DEFFAND* (CHAN, Réserve du minutier central des notaires de Paris, RS/525 à RS/572, microfilm Rés 527/528/529/530/531).
- 29) ヴェルレによれば「18世紀には、快適さの追求から、書き物机、ナイト・テーブルといった、小型で軽量で移動容易な家具が、多く考案、販売された」。P.Verlet, *op.cit.*, pp.193-205.
- 30) 「遺言書」によれば「カンブリ子爵夫人に、ナイト・テーブルと、そこに置かれた磁器と銀のランプ..を贈与する」。「目録」によれば、寝室の低いたんす(bas-armoire)には、ルイ金貨など20,000リーヴル以上の現金が入っていた。
- 31) 「ビスキュイとは、釉薬をかけずに本焼をする技法。ビスキュイによる磁器は、大理石の質感を再現することに適していたため、新古典主義を迎えた18世紀後半のヨーロッパで、この技法による塑像の製作が盛んであった。」…『フランスセーブル陶器美術館所蔵セーブル名品展カタログ』産経新聞社、1997, p.177.
- 32) パルデレ＝ガラブランによれば「17, 18世紀の財産目録において、一般の家庭にあるような絵については、画家についての記載はほとんどなく、むしろ額や画材の別により、価値判断がなされていた」。Cf. Annik Pardailhé-Galabrun, *La naissance de l'intimité 3000 foyers parisiens XVII-XVIII siècles*, Paris, 1988, pp.376-389.
- 一方、レスピナス嬢(Mlle. Lespinasse)などの財産目録を見ると、有名な画家については、画家名、作品名が明記されている。
- 33) G.Grente, Fr.Moureaux, *op.cit.*, p.424.
- 34) パルデレ＝ガラブランによれば「1750年以降の、死後財産目録に記された、1500点の絵画作品のジャンル別内訳は、宗教画がもっとも多く(42%)、次に肖像画(30%)、風景画となっており、静物画、風俗画、神話画は、ごくわずかである」。Cf. Pardailhé-Galabrun, *op.cit.*, p.386.
- デファン夫人が古い貴族の出身であったということから、肖像画を所有していたと考えられること、当時イギリスの風景版画が流行していたこと、上記の統計的数字、を総合的に勘案した。
- 35) M.Th.de Truchis, *op.cit.*, pp.188-189.
- 36) M.Eleb-Vidal avec A.Debarré-Blanchard, *op.cit.*, pp.50-60.
- 37) エレブ＝ヴィダルによれば「ブドワールは、18世紀に誕生した女性専用の親密な空間であり、女主人の寝室と化粧室に隣接し、閉鎖的で暗く、豪華な装飾が施された部屋」。Cf. Eleb-Vidal *op.cit.*, p.58.
- 38) Alexandre Pradère, *L'ameublement du marquis de Marigny vers 1780, L'Estampille*, No193, 1986, 6, pp.44-45.
- 39) L.V. Thiéry, *op.cit.*, tome I, pp.154-161.
- 40) *op.cit.*, tome II, pp.569-573.
- 41) *op.cit.*, tome I, p.454.
- 42) 絵画が、おもに、化粧室や浴室という、女性のアパートマンの中の奥まった、私的なスペースに存在するという特徴は、サン・ドミニク通りのオテル・キンズキーにも見られる。
- 43) 「目録」に明記されたマホガニーの家具はカンブリ子爵夫人に贈与されたティール・テーブル、小テーブル、小たんすの3点のみ。
- 44) 1746年4月22日付の、妹ドララン夫人(Mme d'Aulan)に宛てた手紙。Craveti, *op.cit.*, p.99.
- 45) Marquis de Ségur, *op.cit.*, p.66.
- 46) ヴェルレによれば、18世紀には、次々に新しい家具が生み出され、古い家具の人気はなかった(Cf. P.Verlet, *L'Art du meuble à Paris au XVIIIe Siècle*, Paris, 1968, pp.6-7.)。したがってデファン夫人もマホガニー製の小型の家具以外は「古い張物の家具」をあとから、わざわざ買い求めたとは考えにくい。引越し当時のものを30年間使用したと考えるほうが自然である。
- 47) 『西洋美術辞典』などによれば「ブール家具とは、ルイ14世時代のフランスの有名な家具師ブール(Charles André Boulle, 1642-1732)の得意とした、線形模様のある金属とべつ甲を張った表面、あるいはエボニー材の表面へ、マルカトリーした家具の装飾法、および、その装飾をした家具をいう。彼の死後も18世紀に盛んに作られた」。今泉篤男・山田智三郎編『西洋美術辞典』、東京堂出版、1990, p.528; P.Thornton, *op.cit.*, p.157.
- 48) ティエリによれば、男性絵画コレクターの住居28軒のうち、室内装飾について明記されているものは18軒、そのうち9軒にブールの家具がある。Cf. Thiéry, *op.cit.*, tome I, pp.154, 181, 444, 458, *op.cit.*, tome II, pp.539, 544, 571, 574, 592.
- ヴェルレによれば、ブールの家具は18世紀をとおして、古い様式の家具のなかで、ほとんど唯一、人気を保った。Cf. P.Verlet, *L'Art du meuble...*, p.9.

(2002年10月10日原稿受理、2003年6月4日採用決定)